

## 斐伊川水系 生態系ネットワークによる大型水鳥類と共に生きる流域づくり

### 第2回 生息環境づくり部会

#### 議事要旨

#### あいさつ

出雲河川事務所 この冬も、大型水鳥類をはじめ、ガンカモ類の生息調査の結果やコハクチョウの帰行などが報道されおり、地域話題となっている。「生息環境づくり」をどう取り組んでいくかを考えてく必要性を改めて認識をしている。またテレビ番組でコウノトリの放鳥をはじめとして、鳥が住まう地域づくりの取り組みが全国的に行われていることが報じられていた。斐伊川水系は大きなポテンシャルを持つ場であるので、全国的にも各機関と連携していく水域として、力強く取り組んで参りたい。

#### 議事

##### (1) 「生態系ネットワーク保全・整備拠点事業地区」の選定について（出雲地域 堤外地）

部会長 前回事務局から斐伊川水系の中で、保全整備の候補地が多く提案されていた中で、先般ワーキングを実施して絞込みをし、4箇所を整理した。ある程度の面的な押さえができるエリア、そして国交省の管理エリアから選定した。その他のところも様々な形で対応はしていきますが、まずは出島地区から意見をもらいたい。

事務局 欠席の委員から意見を頂いている。『湿地整備・浅場造成やヨシ帯の再生については、波浪が大きな衰退の要因となるので、波浪を減少させる工夫が必要である。植生帯が整備された部分については、現在安定しているのか衰退しているのかを把握して整備の参考にしてはいかかがか』。

部会長 植生整備という話は、「浅場整備」ということか。

事務局 浅場造成を含めたエリアになると思う。西岸のなぎさ公園や宍道湖グリーンパーク周辺の環境をどう評価するか、ということも含まれると思う。

委員 再生事業というのは、一度つくったものが同じ状態で続くというのは難しい。土砂は波浪によって減少することを前提として、斐伊川河口で砂が溜まった際には、浚渫で出た砂を入れ込むような維持を行うなど、管理計画を検討すると良い。

委員 この場所は小さい水たまりがあり、水生昆虫も生息している。地形的な凹凸があり、水たまりや乾燥している場所があるような、多様性のある環境があると良い。

委員 土砂がどちらに向かって動いているのかを把握して整理した上で、整備地がどれだけ維持管理できるのかということを考える必要があると思う。斐伊川の流下土砂は減少傾向にあると思

うので、例えば、土砂が減少し粒径が粗くなるような要因が出てきた際に、その後どのような保全をするのかということも考えておく必要があると思う。

部会長 水鳥観察施設などの整備の観点の一つに、鳥への影響を考えるとという視点を盛り込み、堤防の立ち入りに関する話等とも絡めて検討して頂けると良い。あと資料的な所で、10 ページの指標鳥類等の生息概況について、ツル類のねぐらを追加して欲しい。またページ下の自然環境の管理計画の部分で、県立の自然公園にはなっていると思う。

部会長 県立の自然公園については、今一度確認した方が良い。出島エリアについては了承頂いたということで次に進める。

次は西代橋周辺の中州、現在牧草地として利用している場所。13 ページの整備範囲は上流に広げる方向で修正した方が良い。

委員 水たまりとなる部分的な「くぼ地」をつくるということだが、これは高水敷に作るということか。

部会長 大雨の後に水たまりが出現し、それをヒシクイが利用することがあるので、高水敷にある程度人工的に整備してはいかがということが、鳥類ワーキングの意見。ヒシクイだけでなくマガンが飛来することもある。

委員 高水敷に水たまりをつくるということは、出水時にその上を水が通ること。そうすると、三次元的にどのような流れができるのか、正直分からない。土砂がたくさん流されてしまうのか、流れが変な方向に行ってしまうのか。くぼ地を反対するものでないが、どういう流れになるかを予測して計画したほうが良い。

委員 すごく大きなくぼ地をイメージされているのかも知れないが、13 ページ下の写真のような、くぼ地に鳥が入ることができるような水深数センチのものを想定していると思う。それでも気を付けた方が良いか。

委員 出水の規模によるが、大規模な出水によっては小さな凹凸も影響することもあると思う。小さな出水であれば水がたまるだけだが、逆に土砂がたまって埋まることもあると思う。

委員 どうしてここにヒシクイが来るのかということには理由があると思う。例えば堤防の直下に「鯰の尾」があり、そして牧草地があるので遮蔽（しゃへい）性があるなどの条件。おそらく堤防の上に車が通れないような構造があるなど、幸運な要因もあると思うので、それらを明らかにし、その維持を、管理の上で検討してはいかがか。

部会長 12 ページの生息環境機能という欄のうち、「現況」には採食、ねぐら、移動休息に丸がしてありますが、「潜在」に丸がないのはおかしい。細かいところは今後、整理が必要。

部会長 ヒシクイはマガンに比べて警戒心が高い。堤防を人が通ると、宍道湖に非難するという行動をしている。観察利用としてあまり、知られていないことが幸いしていると思う。警戒心の強いヒシクイの生息環境整備を目指すのであれば、配慮が必要であると思う。

部会長 西代橋周辺、配慮事項を整理し、拠点の一つとする。

次は、河川敷公園下流のちょうど斐伊川が折れ曲がっているところについて。

事務局 委員のご意見がある。『樹木群について、鳥類の生息環境の保全が求められる反面、流量確保のための伐採が求められる場所なので、部分的な伐採によって鳥類の生息環境と流下能力の確保の両立を図ることのできるような計画が必要である』。

部会長 一般論として川が大きく曲がる場所で湿地をつくらうとするときに、つくりやすいのは川のどちら側か。

委員 単純には河川の外側は削れ、内側に土砂が堆積するので、水がある程度浸かる湿地を考えると、内側の方が適している。

部会長 このエリアは河川幅が広くなり始めたところで余裕があり、曲がったあたりに 20～30 年前は中州のような砂地が広く広がっていた。マガンは通常宍道湖の湖心にねぐらを取っているが、宍道湖が荒れたときにはこちらを中心としてねぐらをとっていた。最近では河川内の砂洲にねぐらを取っていることもあるが、右岸部の樹木伐採を進めたことによって見通しが急に良くなり、その後ねぐらを取ることが少なくなったという経緯もある。

部会長 生息環境としての整備が実施されたらラジコン飛行場との調整が必要であると思う。定期的な調整ということもあるかも知れない。

河川敷公園下流についても整備拠点として進めていくこととする。

部会長 神戸堰から境橋のエリア。事務局からの説明があった通り、部分的に昔の環境が残るエリア。ワーキングでは、多様な環境をつくるということが前提だが、基本的には樹木や草類が生えている部分を切り下げ、常時湿地の状態となるような形で整備しても良いのではという意見であった。また、境橋上流左岸のワンドの部分の護岸補修に合わせ、マコモ植栽をやっていくという取り組みもある。

部会長 多様性という話がワーキングにも出たので、文言として資料として入れて欲しい。希少種でなくても、例えばここには何千羽というツバメのねぐらが残っているので、そのような場所を残しながら、湿地の創出を検討するといいと思う。現在の状況を踏まえながら多様度を高め、大型水鳥も飛来できるような環境整備を実施するのが良い。

部会長 豊岡のハチゴロウ湿地の手法に近いことを取り入れると良い。いずれにせよ単一な環境は望ましくないという前提がある。植物の希少種がまとまっている訳ではないはずなので、配慮をすれば良いと思う。

委員 湿地状にすると、トンボの繁殖が期待でき、野鳥の餌も増えるということで、おもしろいエリアだと思う。

委員 切り下げるとは、流下能力をあげるという観点では良いと思うが、ここは斐伊川の放水路ができてまだ数年しか経過しておらず、大規模な出水も発生していない。ワンドを整備して、それが維持できるかどうかは分からないところが多い。維持の可能性についてある程度予測しておく必要があると思う。

部会長 放水路の整備の中で小規模なワンドを何箇所かつくっているということで、その状況について説明して欲しい。

事務局 放水路が完成してから大きな出水は発生していないが、水深や面積を測定し変化をモニタリング中。放水路の完成により、植物や昆虫などの大きな変化は見受けられていない。

部会長 少なくとも何度か小規模な分流を実施されているが、その結果でワンドが無くなってはいないと見ている。

事務局 委員から、『鳥類を含む、稚魚の避難場所になるほか、止水域を好む植物などの生育場所になりうるので、多面的な環境を恒常的に管理できると良い』とのこと。また、今回の整備箇所に限らない範囲でのご意見で、『指標生物 5 種の中でも、特にトキやコウノトリの生息場所の整備を想定するのであれば、営巣場所の整備も将来的には視野に入れておく必要がある。例えば豊岡では営巣用のマツが失われた為に、人工の巣塔を設置した経緯がある。そのような環境が斐伊川や周辺にどれほど存在するのか、ポテンシャルを把握しておくことも今後は必要』とのこと。

部会長 現状では神戸川の中で特に多様性が残っていることは確か。以前はコハクチョウが餌場に使っていたということもあり、整備箇所として抽出したい。それでは、事務局から提案された 4 箇所について、「生息環境づくり部会」として保全整備箇所として決定し、内容については今後検討していくということにしたいと思う。

(「資料：生態系ネットワークによる保全・整備の拠点(出雲地域)について」のうち、1 ページから 3 ページについての説明)

部会長 現況を反映されていない部分もあるので現況を押さえた上で、将来像をまとめるほうが良いと思う。ツルやコウノトリに関しては情報が少なく整理が難しいところ。

(今後のスケジュールについて)

部会長 今回は、斐伊川・神戸川・宍道湖エリアについて拠点を決めたということで、中海周辺エリアの検討はこれからである。今後のスケジュールをどう考えるか。

事務局 ワーキングについては鳥類ワーキングとして出雲エリアについて議論させて頂いた。22日の協議会では、本日の議論と今後の課題を報告させて頂きたい。その上で、中海周辺域のワーキングは別途開催し進めていきたい。

(全体をとおして)

委員 工事をして出来上がったものを、その後も維持していくのは難しい。米子水鳥公園は自然再生した先進的な場所であるが、その地形を維持することが難しいなどの状況が発生している。最初から完成形ではなくて、維持管理を通じて継続的に生物多様性が向上するような計画を当初から考えると良。

部会長 ワーキングでもそのような意見は出ていた。一時的に整備し終わりではなく、通常の間管理の中でできるほうが長続きして良いと思う。いろいろな意見を集約してそうした考えも入れて、進めていくべき。

## 閉会

事務局 本日頂いた意見を取りまとめ、地域づくり部会で議論された結果と合わせて、協議会で報告させて頂きたい。次回の部会については、次年度改めてご連絡させて頂きたい。

以 上